

日本語が「上手」とは何か

—学習者・教師・日本人の観る「上手」—

杉本美穂（東京日本語学校 長沼スクール）

伊勢みゆき（新宿日本語学校）

キーワード：会話能力、上級レベル、学習者の上手観、教師の上手観、日本人の上手観

1. はじめに

学習者は日本語が上手になるために学習を続け、教師は学習者の日本語を上手にしようとしている。上達すれば、学外で一般の日本人から「日本語が上手だ」と評価される学習者も現れよう。しかし、「日本語が上手」とは一体どのようなことをいうのだろうか。私たちは何を目指し、学びと教育を推進しているのだろうか。本研究調査は、日本語技能のうち特に会話能力に焦点を当て、いわゆる「上級レベル」の学習者を対象に、「上手」とは何かを考察する。そして「会話上手」になるために、教師と学習者が共に進むべき方向性を模索する。

OPIインタビューでは、総合的タスクと機能、場面／話題、正確さ、テキストの型という4要素を基準にレベル判定が行われる。また著者等の所属する日本語学校2校も、独自に会話テストを作成・実施し、学習者の会話能力を測っている。それぞれに「上手」の基準が設定されているが、それは共通の基準として認識できるだろうか。さらに、学習者自身・一般の日本人の「上手」観とも合致するのだろうか。そこで本稿では、学習者・教師・一般日本人の「会話上手」要素の抽出を試みた。

2. 研究対象・研究方法

本研究調査は、以下に示した対象者の調査協力を仰ぎ実施した。

- ・日本語学校（以下 A 校）2018 年度上級クラス履修者 5 名、同クラス担任 2 名
- ・日本語学校（以下 B 校）2018 年度上級クラス履修者 1 名、同校教師 4 名
- ・日本語母語話者の大学院生 6 名

研究方法としては、学習者計 6 名には、OPI インタビューテストを行いレベル判定を出した後、まず直截に学習者の会話上手観を尋ねるほか 2 つの大問を設けて半構造化インタビューを実施し、その叙述から学習者の上手観を示す要素を抽出した。以下に学習者に対するインタビュー質問項目を記す；

- Q1. 日本語で「会話が上手い」とは、どのようなイメージか。
- Q2. 日本語会話能力において、ゴールとして、どのようなものを目指すか。そのゴールに対して、現在満たしていること、満たしていないことは何か。
- Q3. クラスメートの中で、誰が「会話が上手い」と思うか。その理由は何か。

教師に対しては、以下に示した大問によって、同様の分析を試みた。

- Q1. 日本語で「会話が上手い」とは、どのようなイメージか。
- Q2. 調査協力学習者の会話能力を、どの程度のレベルに判定するか。その根拠は何か。

日本語母語話者については、OPI インタビューで「上級・上」判定となり、かつ、学習者間評価・教師評価も高かった計 4 名の OPI 音源を試聴してもらい、上手だと感じる順に順位をつけ、その理由と共に学習者の発話に関して感じるところを自由に話してもらった資料を分析対象とした。

以上の資料を検討し、学習者・日本語教師・日本語母語話者それぞれの「上手」観を対照する。

3. 分析結果

3. 1 学習者の「上手観」

学習者インタビューを分析した結果、以下のことがわかった。まず、上級レベル学習者は、「会話上手」の条件として、OPI 判定基準に照らすところの「機能」を最重視し、それを支える要素として「語彙」に着目している。つまり、自分の発話意図を正しく伝えられるかどうかが重要で、そのためには語彙力が必要だと考えていると言える。その他の「上手」要素としては、「正確さ」のうち「文法」「流暢さ」、そして聞き取り能力を挙げる。また、学習者の「上手観」には会話相手となる日本人の反応が強く意識されており、相互理解を実現するための要素として、発話には直接表出しない社会文化や日本人の感性に関する知識・理解の重要性も語られている。なお、この傾向は会話力評価の高い学習者ほど強い。以下に、第2項で示した大問 Q1 に対する回答と、その他の設問から抽出できた「上手」要素を、言及頻度の高い順にまとめる。

<表 1> 学習者の上手観

学習者 OPI 判定	Q1「会話が上手い」とは	その他の言及
AL1 上級・上	早いスピードで相手が話しても理解できる／自分が言いたいことを語彙の制限を感じず伝えられる／冗談に笑える（語彙不足が原因で理解できないのは「一時的な問題」で、文化的な背景を理解してこそ一緒に笑える）	社会言語／語彙／総合的 タスク／話題／流暢／ 語用／発音
AL2 上級・上	どんな場合でも適切な日本語が話せる（ビジネス、葬儀等）／抽象的なイメージまで伝えられる／自分の個性が伝わる日本語が話せる	場面／話題／語彙／ 流暢／文法／発音
AL3 上級・上	日本語をペラペラ喋れることより、日本人が心の中で言わないことが分かることの方が重要（ペラペラ喋れても、日本人との関係は作れない）／文法が正しい／言葉の選び方がいい／発音に母語の影響がない	語彙／社会言語／文法／ 場面／話題／総合的タ スク／発音／聞き取り
AL4 上級・中	自分の考えていることを、きちんと相手に伝えられる（文法は間違っても、誤解なく伝えられることが、摩擦なく人と付き合う上では最も大事）／相手の話を理解できる／簡単な言葉だけでなく難しい言葉が使える	語用／話題／流暢／語彙 文法／総合的タスク／ 発音
AL5 上級・中	言いたいことを迷わず言える／文法（例えば受身文や使役文）を正しく聞き取ったり使ったりできる／流暢に話せる	社会言語／聞き取り／場 面／話題／流暢／発音
BL1 上級・上	ミスを指摘されない／聞き手である日本人が違和感を持たない／相手にわかりやすい／日本人がよく使っている日本語が使える／標準語が使える	社会言語／場面

3. 2 日本語教師の「上手観」

両校日本語教師へのインタビューからわかったことの1点目は、学習者と教師双方に意識されている「上手」要素として、「語彙」「流暢さ」が挙げられる点である。ただし、「語彙」の内実は、学習者が漢語や専門的な用語など難度の高い語彙使用への志向が高いのに対し、教師はそれのみならず基礎語彙や流行語などをも場面や相手に合わせて適時適当に操ることができることを「上手」要素としており、その点に両者の違いが見られる。2点目は、教師が学習者より「社会言語学的能力」「テキストの型」を

「上手」要素として重くとらえている様子がうかがえる点である。特に「テキストの型」、つまり発話が統語的にも意味的にも結束性を持ちつつ話題が展開されているかどうかという観点は、教師には強く意識されているのに対し、学習者からはそのような様子はうかがえなかった。逆に、学習者が最重視する「機能」に対して、教師はそれほど意識していなかった。

<表2> 日本語教師の上手観

教師	Q1「会話が上手い」とは	その他の言及
AT1	学習者のスピーチレベルに合わせ言葉を選ばなくても通じる／話し手の内容を聞き手が考えなくて済む／母語話者の速く不明瞭な話し方でも分かる／旬なワードが瞬時に出てきたり聞き取れたりする／文法が正しい（ただし、その他の要素のほうが重要）	総合的タスク／語用／語彙／型／発音／文法／話題／社会言語／聞き取り
AT2	語彙（専門的な語彙・漢語・授業学習語彙・友達言葉）がハマっている／自然な発音・イントネーションで話せる／文法的な破綻がなく、きちんと構築されている／教養がある（日本の歴史等に造詣が深い）	語彙／流暢／文法／発音／社会言語／型／総合的タスク／語用／聞き取り
BT1	言い淀みがなく、流暢に話すことができる／自然なイントネーションで話せる／言い間違えた時に気づき、言い直せる／だらだら話さず、きちんとした構成で説明できる／空気が読める／他のことをしながらでも受け答えができる／外来語や方言が理解できる／相槌のバリエーションが豊富	総合的タスク／社会言語／語彙
BT2	答え方をいくつか持っている（人によって答え方を変えられる）／発音が上手／習った文型が使える／テンスがきちんとできる	社会言語／文法
BT3	反応が早い（文法が正しいよりも反応が早いほうがポイントが高い）／頭の中で考えなくても言える／語彙が豊富	社会言語／語彙
BT4	流暢／語彙が豊富／文の組み立てができる／発音が聞きやすい／例示や比喻を使い、相手にわかりやすく伝えることができる／受け答えが正確／文法が正確／社会性があり話題が豊富／自分から積極的に話す	流暢さ／文法／社会言語

3. 2 一般日本語母語話者の「上手観」

日本語母語話者に対するインタビューから抽出された要素で特徴的なのは、まず、「機能」「話題」に関する言及で、話題・意見・感情表現の豊かさや深さが「上手」要素として重視されている。また、話題の展開について、聞き上手という要素が指摘された。OPIでは、話題を自分から積極的に発展させられることがプラス評価となる一方、話題が発展しない場合やすり替えられる場合は評価にはならない。しかし、日本語母語話者の評価では、自分は黙して相手に話させるということ・会話が行き詰った場合に新しい話題を持ち出すことが、積極的に肯定されている点の特徴的だった。2点目は、「正確さ」に関するもので、比喻ことわざの使用・あいづちや間の取り方・「流暢さ」が功を奏した結果、会話全体をわかりやすく、かつ母語話者の感覚で自然に感じられるようにできることを「上手」要素に挙げている。これらのことから、母語話者の「上手」観は、内容面の豊かさと同時に、分かりやすさ、理解・共感のしやすさをも含んでいることがうかがえる。また、それが難しい際は、どれだけ巧みに会話の停滞を回避できるかを重要な要素としてとらえている点にも特徴がある。

<表 3> 日本語母語話者の上手観

母語話者	「会話が上手い」理由
J1	自分から話題を入れられる／話している内容が高度／話し方が日本人に近い（聞き上手）／微妙な気持ちを表したり、曖昧な表現ができる
J2	比喩ことわざが自然に使える／流暢に反応できる／語彙の選び方や使い方が自然／助詞が上手に使える
J3	自分の意見が言える／話している内容が高度／自分から積極的に話を発展させていく／間の取り方がうまい／複文が自然に使い、文章のつなげ方がうまい／ことわざが使える／イントネーションに問題がない
J4	口ごもらず、スムーズに話している／一生懸命聞かなくてもわかる／話題が豊富／聞き取りやすい／あいづちの打ち方がいい／声から感情が伝わり、積極的に自分の気持ちを伝えられる／自分の意見が言える
J5	聞き取りやすい／イントネーションに癖がない／相手にわかりやすく伝える工夫をする／話題が豊富
J6	補正をかけなくてもわかる／悩まずにスラスラと喋っている／日本語を使うことに慣れている／タメ語・敬語の使い分けができる／聞き上手

4. まとめ

学習者と日本語教師の「上手」要素を比較すると、両者とも「語彙」「流暢さ」を重視する点ではほぼ同じ傾向を示しつつも、学習者の「上手」観が「機能」への広がりを見せるのに対し、日本語教師のそれは「テキストの型」や「正確さ」に集約していく傾向が見られる。また、日本語教師・OPI 判定基準の要素を一般の日本語母語話者の「上手」観と対照した場合、母語話者は発話内容への共感のしやすさや会話の停滞を回避する方策を重視する点に差異がある。一方、母語話者のこの「上手」観は、自分の発話意図を正しく伝えられることを最重視する学習者の「上手」観とは共通性が高い。

以上の分析から、日本語教師の「上手」観、すなわち教室活動における会話練習の評価基準や指導項目は、一般の日本語母語話者・学習者の「上手」観と一部ズレが生じていることがうかがえた。今後は、母語話者的な視点をより意識しながら学習者の目指すことを支援する指導姿勢と内容が必要であろう。具体的には、「語彙」の拡充はもとより、「機能」「話題」を重視し、さらに会話の背景にある社会文化に関する理解をも促せる会話教育の構築である。そのための実践的な教室活動の内容については、今後の課題として引き続き検討していきたい。

参考文献

- 鎌田修・嶋田和子・迫田久美子編著（2008）『プロフィシェンシーを育てる—真の日本語能力をめざして—』凡人社
- 鎌田修・嶋田和子編著（2012）『プロフィシェンシーを育てる 2 対話とプロフィシェンシー』凡人社
- 鎌田修・嶋田和子・堤良一編著（2015）『プロフィシェンシーを育てる 3 談話とプロフィシェンシー—その真の姿の探求と教育実践をめざして—』凡人社
- 嶋田和子（2008）『目指せ、日本語教師力アップ!』ひつじ書房
- 嶋田和子（2017）『つながり』重視の日本語学習パラダイムシフト—日本の現状とこれから』第 11 回 OPI 国際シンポジウム予稿集
- 田中真理・阿部新（2014）『Good Writing へのパスポート』くろしお出版
- 牧野成一・鎌田修他（2001）『ACTFL-OPI 入門—日本語学習者の「話す力」を客観的に測る』アルク
- 牧野成一監修（1999）ACTFL ORAL PROFICIENCY INTERVIEW TESTER TRAINING MANUAL, 『ACTFL-OPI 試験官養成マニュアル（1999 年改訂版）』アルク